
紳士淑女の革命遊戯

初瀬 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紳士淑女の革命遊戯

【Nコード】

N5333Z

【作者名】

初瀬 泉

【あらすじ】

アヴァロン王国の伯爵家令嬢ミランジェ。

兄に結婚を急かされる彼女が夜会で出会ったのは見知らぬ紳士だった。

それが守られるだけの時代の終わり、無知という名の平穏の幕切れ。

prologue

炎とはこんなにも激しく、こんなにも荒々しいものだったのか。
高い天井から吊り下がるクリスタルガラスのシャンデリアに炎が
反射して異様なまでに輝いている。重厚な作りのカーテンはみるみ
るうちに焼け焦げていく。

「知識として知ってはいたけれど、炎は熱いのね」
彼女は赤く染まる室内を見回しながら言った。

「それに酸素も薄くなつてじきに呼吸も苦しくなってくるだろうな」
彼はまるで他人事のように言い、向かいのソファに足を組んで座
っている。

「それは嫌。苦しいのも痛いのも嫌い」

彼女は真顔で首を横に振った。

「それは俺も同感だ」

彼も深く頷く。そしてこの状況において嫌味な程に優雅に足を組
み替えた。

「さあどうする？ このままではお互い焼死体だ」

「どうするも何も……」

彼女は渋い顔でガラスが溶けかけている窓へと視線をやった。

そろそろ熱気に頭がクラクラする。確かに彼の言った通り息苦し
さも感じる。焼けた家財から黒い煙が立ち上り、容赦なく目や喉を
痛めつける。

それでもその痛みなど感じないかのように彼女は背筋を伸ばし、
はっきりとした声で言った。

「私は死にたくない」

彼女の答えに満足したように彼は笑った。

煌々と燃え盛る炎の中、ミランジェ・ヘリテージとエセル・クロ
フォード。彼女と彼は炎に包まれた室内で向かい合って座っていた。

令嬢の諸事情

大陸の西の島国アヴァロン。

八百年の歴史を持ち、元は小さな島だけが領土だったが八百年の間に世界中に植民地を広げ、太陽の沈まない国と呼ばれるようになって長い王国。

そのアヴァロン王国の本国である島国、その首都リンデイン。

物語はそこから始まる。

ヘリテージ伯爵家の屋敷は多くの招待客で溢れかえっていた。

エドワード・ヘリテージ伯爵はまだ二十七歳と若く、理知的な美貌の伯爵と社交界で名高い。既に妻を迎えてはいるが今も婦人達からの人気は高く、夜会を開けば大勢の招待客が詰めかけてくるのはヘリテージ家では見慣れた光景だ。

しかし近年さらに招待客の数が増したと、華やかな夜会の裏で働き通しの使用人達の間では嘆きの声が聞こえる。

招待客がさらに増えたその要因であり、さらには使用人達同様、夜会の裏で溜息を零すのは先日十七歳になったばかりのヘリテージ伯爵家の末娘ミランジェ・ヘリテージだ。

兄であるヘリテージ伯爵や義姉、母と共に招待客達に挨拶を済ませ、ようやく一人になったミランジェ・ヘリテージことミラは大きく息を吐いた。

栗色の巻き髪に深緑の大きな双眸、兄に似て容貌に恵まれたはずの少女はにこやかに招待客達と挨拶を交わしていた時とは別人のようになんざりとした顔だ。

「ああ疲れた」

今日初めて着る、仕立てたばかりの惜しみなくレースとフリルをあしらったピンクを基調にした夜会用ドレスの着心地は最高だ。姉に贈られた、薔薇の細工が施されたネックレスとピアスもお気に入りです。つけていると幸せな気分になれる。それは今日も例外ではなかった。少なくとも、先程の招待客への挨拶前までは。

一人でバルコニーに出ると、庭園に咲く薔薇の香りが微かに漂ってきた。甘い香りに少し頬が緩むが、そう簡単に今日の気分は浮上しそうにない。

夜風にあたりながら、ミラは口を尖らせる。

「兄上め。またあんなに独身男を呼んでくれて……どれだけ私に結婚させたいのよ」

ヘリテージ家の夜会を訪れる招待客が増えた理由。それはヘリテージ伯爵が妹の結婚相手として見つかった独身男性達を招待するようになったからだだった。

「まだ私は結婚なんてする気はないって言っているのに……何であ人の話を聞かないのよ。無駄に偉そうだし、何様のつもりなのよ」
まだ周りの同世代の友人たちだって結婚していないと訴えているのに、あの頑固な兄は妹の意見を全く聞き入れる気がないらしい。
兄とは十も年が離れているため、幼い頃からほとんど交流がなかった。その上、保守的で謹厳実直な兄と陽気で楽しがりの自分とは性格が違いすぎるのだ。

さらに数年前、父である先代ヘリテージ伯爵が死んで以来、当主としての自覚を持ち過ぎたのかますます頑固になって、何かとミラの生活にまで口を挟むようになってきたのだからたまったものではない。

——そのドレスは品がない。

——遊んでいる暇があるならピアノのレッスンを増やせ。

——修道院付属の寄宿女学校に入って少しは淑女らしさを身につけて来い。

——社交界デビューも済ませたのだから早く嫁に行け。

——いいから嫁に行け。

——口答えせず嫁に行け。

そうして今まで並べられてきた言葉を思い返していくうちにますます気分がめいってきた。

「鬱陶しい……分かってはいたけど鬱陶しすぎるわよ、何なの？」

あの兄は……嫌がらせ？ 神経衰弱でもなったらどうしてくれるのよ」

とは言え、所詮は養われの身だ。貴族らしい優雅な生活が送れるのは全て兄が伯爵としての務めを果たし、父が起こした事業を受け継いでくれたからだ。

父が亡くなった時、世間知らずの母と姉、そして自分だけではあつという間に資産を食い潰し、今頃路頭に迷っていただろう。

何不自由のない暮らしをさせてくれる兄にはもちろん感謝している。けれど昔よりさらに酷くなった過干渉と過保護は別だ。姉に対してはそうでもなかった気がするのだが、なぜか兄はミラにばかり鬱陶しいほど干渉してくる。少し出かけるにも渋い顔をし、可能な限りミラを屋敷から出そうとしない。屋敷で暮らしている分には何も言われないが、ひとたび外出となれば家族の誰かに付き添ってもしらい、さらに使用人も数人連れて行けと言う。

王族ではないのだからそこまでしなくても問題ない、むしろ自意識過剰のようで恥ずかしいと何度訴えても兄は聞く耳を持たない。

ところが社交界デビューを果たしてからというもの、今度は何かと言うと結婚しろと言ってくる。それこそ結婚しろが挨拶代わりになるほど言われる。

「ずっと軟禁生活が続いたと思ったら、今度はよっぽど私を家から出したいって言うのかしら。……何よ、こーんな可愛らしい妹がいて何が不満だって言うのよ」

口に出してみると余計気分が沈んだ。

兄は自分が嫌いなのだろうか。

昔から気が合うとは言い難かったが、嫌われていると感じたことはなかった。両親や乳母^{ナニー}は皆、兄は心配性だから年の離れた妹が心配でしようがないのだと笑っていたけれど。

「けど、最近の兄上は明らかに私を追い出したがっているようにしか思えないじゃない」

屋敷内からは音楽が流れてくる。もう舞踏会は始まったのだろう。早く戻らねばまた兄から怒涛の勢いの小言を浴びせられてしまう。

「あーあ。でも戻りたくない」

紹介される紳士達は皆下心が隠し切れておらずそのほとんどが、黙っておけば深窓の令嬢であるミラの外見に騙された者、あるいは伯爵家の資産狙いだということがありありしていて、会話するだけで気疲れしてしまう。

そんな人間と結婚して生涯を共にしなければならないなど、考えただけで憂鬱になる。

かと言ってミラは自分から進んで結婚相手を探しに恋愛をしようと思えるタイプの人間ではない。未婚女性の地位が低いこの国では生涯独身で過ごすということは難しい。決して不可能なわけではないが、男家族にお情けで養ってもらうか仕事を探すかしなければならぬ。あの兄にいつまでも自分の言いつけに背いて独身でいる妹をお情けで養ってくれる人情があるとは思えない。となるとどこか家庭教師の仕事でも探すか。王宮で侍女として仕事を探そうかとも思ったが、自由気ままに生きるミラに務まるような仕事とは思えない。そもそもこの国には上流階級の女が働くことは卑しいという古い意識が根付いている。

保守的な兄のことだ。仕事を探して一人で生きて行くと言っても猛反対され、無理やり適当な貴族に嫁に行かされて終わるだろう。

「もう修道女になるしかないかしら」

修道院で神に一生を捧げ、清く正しく暮らす……ミラには一番向いていない気がするが、この際贅沢は言っていられない。

結婚してその気もない男との生活に生涯を捧げるか、修道女とな
って生涯を神に捧げ過ぐすか二つに一つだ。

何という究極の選択だ。

どうしようかと大きく溜息を吐いた時。

「あまり外にいては冷えてしまいますよ」

背後から聞こえてきた柔らかな声音にミラは反射的な振り返った。
そこには黒のタキシードを着て正装した紳士が柔和な笑みを湛え
て立っていた。

侯爵令息との対話

「初夏とは言え、この国の夜は冷えますから」

目を丸くして黙っているミラに、なおも彼は柔らかに微笑む。

ミラより若干年上らしい紳士は黒髪にグレーの双眸。まったく見知らぬ人間だが警戒心が湧かないのは涼しげに整った顔立ちに常に人に安心感を与えるような笑みを浮かべているからだろう。

いかにも上流階級の子息といった風情の彼も、兄が招いた婚約者候補なのだろうか。そもそも彼が、ミラが主催者の妹だということに気付いているのかも分らない。

どちらにせよ、貴族階級の一員として迂闊に非礼な真似はできない。ミラは社交用の笑顔を作り、当たり障りのないよう応じた。

「お気遣いありがとうございます。けれど少し人に酔ってしまったようで夜風に当たりたくて。少ししたら戻りますわ」

だから一人にしておいてくれと続けたところだが、さすがにそれを口にはすることはできない。

すると、そのまま屋敷に戻ってくれるだろうと思っていた紳士はミラの隣までやってきた。

「そうですか。実は私もあまり人ごみが得意ではなくてこちらまで逃げてきたのです。よろしければ私も一緒にしてもよろしいでしょうか？ レディ・ミランジェ」

どうやら見知らぬ紳士はミラの素性を知っていたらしい。

主催者の家族と知られているのなら、ますますもって無難な対応をするしかない。

「ええ、どうぞ」

そう答えながらも適当なところで切り上げて書斎にでも籠ろうと思っていると、見慣れぬ紳士はバルコニーの下に広がる庭園を眺めながら話しかけてきた。

「噂には聞いていましたがヘリテージ家の庭園は見事ですね。特

に薔薇が素晴らしい。随分丹精込めて育てられたのでしょね」

庭園には様々な品種の薔薇が植えられている。ミラが生まれた時からそうだったし、執事の話ではずっと昔からヘリテージ家では薔薇の栽培に力を入れてきたのだそうだ。思考錯誤の末、新種の薔薇を生み出した先祖もいたらしく、当時の王族に献上したという話も聞いたことがある。

「我が家は先祖代々、皆薔薇好きなんです。少々偏執的と言ってもいいくらいかもしれません」

「それはそれは」

紳士は面白そうに笑った。

「ですがそれだけ好まれたからこそ、これほど見事な薔薇を咲かせているのですね。私は長く外国にいたのですが、どこの国でも見たことのない品種が多くある」

「そんなに多くの国を回られたのですか？」

「そうですね。父が貿易商を営んでいるのでそれについて回ったりしたので」

控えめに紳士は微笑む。

「貿易商……と言うともしかして、クロフォード侯爵のお身内の方ですか？」

「ああ、失礼いたしました。まだ名乗っていませんでしたね。私はウォルター・クロフォードの次男でエセル・クロフォードと申します」

そう言ってエセルは優雅な仕草で礼をした。

クロフォード侯爵は侯爵位以外にも複数の爵位と広大な領地を持ち、海外貿易で成功した国内有数の大富豪だ。そのクロフォード侯爵とミラの父である先代ヘリテージ伯爵は古い友人であり、公私ともに親しくしていた。父が急死した際も随分世話になったことを覚えてる。

高い身分にも関わらず格式張らない気さくな人物で、幼い頃はミラともよく遊んでくれた。そのため爵位はクロフォード家のほうが

上位にも関わらず、ミラも親しい親戚に対するかのように懐いたものだった。

そう言えばクロフォード侯爵には二人の息子がいて、一人は確かミラの兄と同じくらいの年。もう一人はミラより若干上なのだが体が弱く、ほとんど外に出ないのだと聞いた子があつた気がする。

ミラもドレスの裾を摘まんで礼をする。

「やはりクロフォード家の方でしたか。直接お会いするのは初めてですね。ミランジェ・ヘリテージです。今日はようこそお越し下さいました」

兄の選んだ婚約者候補かもしれないが、古くから知っていて今も信頼する侯爵の身内ということで少し警戒心が解けてきた。

「クロフォード侯爵にも最近お会いしていないのですが、お元気でいらつしゃいますか？」

「ええ。相変わらず元気に世界中飛び回っていますよ。今は東のほうの国を中心に回っているらしく、たまに寄越す手紙もどんな生き物がいてこんな食べ物などが、子供のようにはしゃいでいます」

「クロフォード侯爵らしいですね」

幼い頃の記憶と変わらない侯爵を思うと自然と笑みが浮かぶ。

「ロード・エセルも東国へは行かれたことがあるのですか？」

「いいえ。私は残念ながらまだ。外国と言っても近隣国ばかりで」

「近隣国と言うと、フランシズ王国などですか？」

尋ねながらミラの内にむくむくと好奇心が湧いてくる。

フランシズ王国は海峡を隔てた先の大陸の一王国で、アヴァロンとの繋がりも深い。

芸術の都として名高く、世界一の歴史を誇るオペラ座や世界各国の美術品を集めた美術館などがある。そして女性のファッションの流行はフランシズで生まれると言われている。

ミラの最も行ってみたい国の一つだ。

するとエセルはやんわりと微笑み答えた。

「そうですね。フランシズが一番馴染み深いです。先日までフラン

シズの大学に通っていたので」

「留学されていたのですか？」

「留学と言いますか、子供の頃から療養を兼ねてフランシズの地方に住んでいたのです、そのまま大学に入学したんです」

「そうだったのですか。クロフォード侯爵から伺ってはいましたが、お体の具合はよろしいのですか？ 今日もしや兄がご無理を言ったのでは？」

あの兄ならそれくらいはしかねない。既知のクロフォード侯爵の御子息ともなればミラも無碍にはしまいと、強引に招いた可能性だってある。

もしそうだったら兄に代わって謝罪しなければとミラが身構えたところでエセルは声を上げて笑った。

「無理にだなんてとんでもない。ヘリテージ伯爵には子供の頃によく話し相手になってもらったので、帰国したら挨拶に行かねばと思っていたところで有難く今日のご招待を頂いたんです」

「あの兄が話し相手ですか？ あまり愛想のよい人ではないのですけれど、きちんと話し相手など務められましたか？」

「もちろん。昔から博識でしたからね。随分色々な話を聞かせてもらいましたよ。昔はあまり外出できなかったので彼が遊びに来てるのが楽しみでした。先代伯爵にも、当代伯爵にも私は随分お世話になりました」

そう言って笑ったエセルはどこか懐かしむような顔をしていた。

ああ、この人は本当に父を思ってくれた、悼んでくれているんだと思うと少し嬉しく、そしてほんの少しだけ寂しくもなった。

二人の間にしばらくの沈黙が生まれた。

屋敷内からは賑やかな笑い声と共にオーケストラの音色が流れ聞こえてくる。

遠くにワルツを聴きながらの初夏の闇は意外に心地よいものだった。

沈黙が苦にならない相手もいるのか。そう思いながらエセルの顔

を見ると目が合った。

グレーの瞳が月光を受けて銀色に輝いている。

不思議な色合いだ。その色に見惚れているとエセルの目がずっと細められ、静かに口を開いた。

「レディ・ミランジェはご存知ですか？」

ずっと周囲の温度が下がった気がした。

「この国を創設した者達の話を」

流れるように言葉を紡ぐ彼の目は、こんなにも静かだっただろうか。

先程まで感じていた安心感はどこへ行ったのだ。

ミラはドレスから剥きだしの肩を抱くようにしながら声を振り絞った。

「……少しなら」

現在のアヴァロン本国であるこの島国から大陸へと渡り学問を修めた四人の賢人が島に戻り知識を与え、技術を与え、島民達をまとめ、アヴァロン王国を建国した。

その四人のうちの一人がアヴァロン王家の祖先だと言われている。残る三人も貴族として王家を支え、アヴァロン王国を発展させた。

この国の人間なら誰でも知っているようなおとぎ話にも近い昔話だ。

そう話すとエセルはまるで別人のようにわざとらしく大きな溜息を吐いた。

「何だ。それじゃあそこらの子供とほとんど変わらない程度の知識しかないじゃないか」

侯爵令息との対話 2

一瞬、ミラは目の前の紳士から放たれたその言葉の意味がわからなくて凍りついた。

まさか。いやまさか少しばかり雰囲気は変わったが、絵に描いたような紳士のエセルがあんな粗雑な言葉遣いをするわけがない。きつと気のせいだ。空耳に違いない。

だがエセルはさらに追い打ちをかけてきた。

「あんた一体、十七年も生きていて何をしていたんだ」

あからさまな侮蔑の視線。

それは明らかに目の前の紳士が、黙って微笑んでいればきらきらしい紳士であるエセルから向けられている。

ようやく気付いた。

ああ、自分は騙されていたのだと。

「……ロード・エセルはそちらが素ですか？」

低くそう尋ねるとエセルは笑った。上品な良家の御子息らしきなど微塵も感じられない皮肉っぽい顔で。

「もちろん」

紳士ぶっていても実際に中身が紳士であることなど稀だ。嘘偽りは処世術でしかない社交界に身を置く者なら尚さら。

あの口うるさい兄だって社交界での評判はいいのだ。いつだって澄ました笑顔を浮かべているものだから、その容姿に騙されたご婦人達に「まさに紳士の中の紳士」などと言われたりしている。実際はいつもしかめっ面で口うるさくて保守的な頑固者なのに。

「あーあ、騙された」

ミラはうんざりと肩を落とした。

先に素を晒してきたのはエセルだ。ならミラとてこれ以上猫を被る必要もないだろう。

「あまりに堂に入った上品な言葉遣いと立ち居振る舞いにすっかり

騙されたわ」

恨みがましく見てもエセルは余裕を崩さない。どころか更なる悪態をついてきた。

「自分から知ろうとしない人間はいつだって騙されるだけだろう」
突き放すような温度のない言葉にさすがに怒りが湧いたが、エセルの言葉は事実だ。

兄が女に学問は必要ないと言ったからあまり学ぶ機会がなかったというのもあるが、知ろうとしなかったのはミラ本人だ。おとぎ話レベルの昔話を知っただけで、それ以上を自ら学ぼうとはしなかった。

それはミラの怠慢で、呆れられても仕方ないとも思う。

「……ではロード・エセルが教えて。その辺の子供よりは詳しい知識を」

挑むようにエセルを見ると、彼はにんまりとどこか意地悪く笑った。

「その辺の子供より詳しい知識を俺が持っているとは限らないのでは？」

本当にさっきまでとは別人だ。社交界では皆猫を被っていて当たり前だが、こうも見事な豹変ぶりなど初めてお目にかかった。呆れ驚くより、いっそ感嘆するほど見事だ。

「あなたが知りもしないことをあたかも知っていることのように話すほど恥知らずな人ではないと見込んで聞いているの」

「箱入りのお嬢様にはもう少し他人を疑うことをお勧めするよ」

エセルの皮肉っぽい言葉にミラは口を尖らせる。

「箱入りなんかじゃないわ。カゴ入りよ、カゴ入り」

「カゴ？」

怪訝そうに聞き返してくるエセルに胸を張って答えてやる。

「箱に入っていたら外のことなんて全然見えないでしょうけど、私は違うもの。カゴの網目からほんの少しだけで外が見えていたもの。全然見えていないのと、少しでも見ていたのじゃ全然違う」

「はあ、カゴなあ。自称カゴも箱も大して変わらないように思うが」
感心したのだから、呆れたのだからわからないような声を上げてエセルは首を傾げる。

「まあどちらにしてもエディの教育方針か。先代殿とは随分違うよな」

エディは兄の愛称だ。幼い頃ならともかく今となっては母か乳母くらいしか呼ぶこともないし、兄自身そう呼ばれることを許す人間ではないのだが、エセルはまた特別なのか。

「あなたは本当に兄上と親しいの？」

ここまで唐突に豹変されると先程まで話した全てが疑わしく思えてくるのだが。

疑惑の目を向けるミラにエセルは笑う。意地悪くもなく、皮肉っぽさもなく、子供のように楽しげに笑う。

「エディは俺の数少ない幼馴染みだと思っている。年は違ったし、性格も違ったけど、あいつは物知りだったからいつも後について回ったな。気が向けば遊んでもくれたし」

「ふうん。兄上がねえ」

そんな面倒見のよい人間だったことなどあっただろうか。とても信じられない。

侯爵令息との対話 3

露骨にそんな思いを顔に出すと、エセルは呆れ切ったような表情を浮かべた。

「実の兄に対する他人の評価こそを疑うっていうのもどうなんだ」「だって私、兄上のことなんてよく知らないし。私が知っていることと言ったら異様に頑固で保守的で古臭い思想に頭まで浸かっている、そのくせ社交界での評判だけは無駄にいいってことくらいだもの」

「実の兄に対して容赦ない意見だな」

エセルは面白がるように言うが、別に面白いことも何もない。ミラにとってはただに事実だ。

「年が離れているからそんなに遊んだ記憶もないし、気が合わないんだもの。仕方ないじゃない」

そう言って肩を竦めて見せる。

「私にとってはこの家で最も口うるさくて、そのくせ過保護なのかなんなのか一人で外出すらさせてくれない鬼看守みたいなものよ」
思うままにはつきり言うど、さすがにはつきり言いすぎたのかエセルの澄ました顔が苦笑交じりになった。

「そこまで言うか？ エディが聞いたら落ち込むぞ」

「兄上が？ 冗談。あの人が私の言葉を聞いたって、落ち込むどころか怒り狂うだけよ。養われている分際で生意気言うなって。だいたいね、私が無知なのは兄上のせいによるところも大きいんだからよほどの用がない限り屋敷から出してもらえないし、女学校にだって通わせてもらえなかったのよ？」

「あいつなりに考えがあるんだろう。意味もないことをする奴じゃない」

「あなたがなぜそんなに兄上なんかを評価しているのか知らないけど、私があなたに十七年も生きていて何をしていたんだなんて言わ

れる責任の半分は兄上にあるんだから」

軽く睨むとエセルはああ、と声を上げた。

「もしかしてさっき言った事を根に持っているのか。根暗な女だな」
「……大抵の人間は、あれだけあからさまな侮辱を受けたらしばらく忘れないと思うけれど」

さすがにあれを笑って受け流せるほどミラは人間が出来てもいなければ、記憶力がなくもない。むしろ記憶力はそう悪くないほうであるつもりだ。

「そうだ、話が逸れたわ。さぁロード・エセル、兄上のことなど置いておいて、教えて下さいな。子供の知識よりは詳細なこの国の創始者たちのお話を」

「あんた、可愛げがないって言われないか？」

「言われるほど深い付き合いのある人間なんてほとんどいないもの。兄上にカゴ入りで育ててられてきたから」

一応友人と呼べる存在はいるが、あくまで表面上の付き合いだ。貴族としての付き合いの延長上に過ぎない。お互い本音を話すことはないし、あくまで当たり障りのない、儀礼的な会話をするくらいだ。

思えば、こんなに素の自分で接した他人などエセルが初めてかもしれない。

するとエセルは茶化すように言ってきた。

「それはまた。カゴ入りお嬢様におかれましては御苦勞をなさったようで」

嫌味なくらい慇懃な態度がまた腹立たしい。今すぐ頭の上にワインのボトルでも降ってくる呪いでも掛かれればいいのに。

無言で地味な怒りを溜めこんでいたミラにエセルは屋敷を見上げながら言った。

「それでカゴ入りお嬢様。あまり人に聞かれたい話じゃないんだが、どこか人の出入りが無い場所はないか？ さすがにここじゃあまずいだろう」

「人の出入りのない場所……」

一番いいのはミラの私室だが仮にも独身の女が、さすがに今さっき知り合ったばかりの、それも性格の悪い男を通すのはどうかと思う。

だが今は夜会の最中で屋敷の至る所に人がいるはずだ。ミラは考えながら灯りがついていない部屋ミラの窓を探した。

三階建ての屋敷の窓はどの部屋も煌々と明かりが灯っている。広間や舞踏室、食堂にビリヤードルーム、そしてそれらの部屋に続く小部屋は当然のように招待客に開放しているし、使っていない部屋などあるだろうか。

「ああ、書斎は？ ライブラリー 完全に出入りが無いとは断言できないけれど、静かに話すには丁度いいと思う」

「書斎か。まあ盗み聞きされる心配はないか」

「じゃあこつちよ。知らない男性と二人でいたなんて口うるさい女中なんかに見られたら面倒だから、静かについてきて」

そう言って背を向けたミラに、エセルは小さく溜息を吐いた。

「カゴ入りのレディ・ミランジェ。ひとつ忠告しておこう」

「何よ？」

「世の中には悪い人間てのはたくさんいる。幸いにして俺は善良極まる紳士だからいいが、そうでないエセ紳士というのも多くいるわけだ」

「あなたのどこが善良？」

つい聞き返したミラの声など聞こえなかったように、芝居がかった仕草でエセルは続けた。

「だから善良なる俺は、親愛なる友人の妹に注意を促そうと思う。いくら口で丸めこまれようと、見知らぬ男と密室で二人きりになるのは危険だから通常は行わないように、と。世には例え、年齢の割に色気を持ち合わせていないようなカゴ入り令嬢にだって手を出す男もいるなからな。俺は違うけど」

危機感のないお嬢様は気をつけるように、などと言ってエセルは

結んだ。

わざとらしい真顔なのが非常に腹立たしい。

こめかみが引き攣るのを感じながら、ミラは笑顔で返した。

「……ロード・エセル。私は今すぐここで悲鳴を上げるべきかと思うのだけど、どう思う？」

むしろ上げたい。そしてあらぬ罪を被せてやりたいところだ。

だが性格の悪い自称善良なる紳士は、世間知らずのミラの上を余裕で越えていく。

「独身の若い女が平気で男と二人きりになった、と世間から後ろ指をさされたいのならご自由に」

最初にミラを勘違いさせた、上品そうな笑顔で。

この男はきつと他人を怒らせる天才だ。

ミラはそんなに沸点の低いほうではないから、きつと彼は相当なのだ。恐らくアヴァロン王国史上最高の天才だ、間違いなく。

「ロード・エセル。私は今、とてもあなたに痛い目に遭ってほしいのですが」

「謹んでお断りしましょう。レディ・ミランジェ」

まるで天使のような笑顔を浮かべ、エセルは屋敷とテラスを結ぶガラス扉を開いた。

勝者が語らぬ歴史 1

ヘリテージ家の書斎は一階にある。程良く広間や食堂から離れているため、夜会の最中であっても喧騒は遠い。

幸い、ミラとエセルが書斎に入ると、招待客の休憩室としても使えるように明かりこそ灯っていたが人はいなかった。

「これはすごいものだな」

書斎に入るなり、エセルが感嘆の声を上げた。

室内の壁という壁は天井まで届く高さの書架に埋め尽くされ、その書架にはぎっしりと古今東西の書物が詰まっている。数えたことはないが、祖父の代で蔵書数は二万冊を超えたとは聞いている。父も兄も読書を好んだから、今は祖父の代よりはるかに蔵書数は超えているだろう。

「うちは薔薇好きでもあるけれど、本好きでもあるの。とりあえずそこ、座って」

ミラは書斎の中央に置かれた長椅子に座り、向かい合わせに置かれた一人掛けの椅子を指差した。

「これはご丁寧に」

そうして流れるように椅子に座る。それはミラが見てきた誰よりも美しい所作だ。

悔しいことにエセルは性格こそ悪いが、その外見や所作はまさしく貴公子だ。黙って先程のように猫さえ被っていれば社交界中の女性達が夢中になるのではないかと思う。本性を知ってしまったミラは例外となるだろうが。

そんなことを考えていたミラの向かいで、エセルは楽しげに室内を見回していた。

「昔聞いたことはあったが、本当に大した蔵書数だな。面白そうな本がたくさんある。後でゆっくり見せてもらってもいいか？」

「別に構わないけど」

どうせ夜会の最中はいつも招待客に開放しているし、別に許可など取る必要はないのだけれど、とミラが思いながら答えると、エセルは顔を綻ばせた。

「そうか。ありがとう」

上品ぶった笑顔でもなく、意地悪さを全面に押し出した笑顔でもなく、本当にただ嬉しそうな笑顔だ。ただの二面性の持ち主かと思えば、こんな顔もできるのか。

少し意外に思い、それから少しだけ親近感が湧いた。

どうやら性悪紳士は意外に本が好きらしい。外で話していた時より刺々しい雰囲気が和らいでいる気がする。

「さてと、それじゃあ本題に入ろうか」

エセルは膝の上で手を組んで、また一筋縄ではいかないうような表情に戻ってミラを見た。

「さっきあんたが言っていた、四人の人間が王国の建国において大きな役割を果たしたことは事実だ。リーダー格だった四人の一人が王家の始祖であることも事実。残る三人が貴族として王を支えていたことも事実。まああんたの話は間違っていないってことだな。ただ肝心なところが抜けているってだけで」

「肝心なところ？」

「そう。むしろそれこそが王国建国において最も重要だったって言うのに」

背もたれに寄り掛かるようにしてエセルは続ける。

「四人の賢人は、当時まだ国として機能していなかったこの島から大陸に渡り、学問や技術を修めて帰って来た。確かにそれも間違いじゃない。けれど四人が大陸に渡った一番の理由は大陸で魔術を学ぶためだった」

「……ちよつと待って。ま、魔術？」

「ああ、魔術」

エセルは至って真顔で答える。そしてまだ口を開こうとしていたミラを制するように話を続けた。

「当時は世界的に魔術が流行していたんだ。この島にも独自の魔術があった。もっとも、研究が盛んだった大陸の国々ほど大したことはできなかったらしいが。当時の大国には必ずといっていいほどお抱えの魔術師がいたし、魔術師の養成に力を入れている国も多かった」

「そ、それは聞いたことがあるけど。魔術っていうのは医学や薬学、数学の前身だったって」

「それも嘘ではないな。錬金術や魔術、今日では古人の夢想でしかないと言われているそれらは現代の学問の進歩に役かったと言われている。もちろんそう面があったことも嘘じゃない。四人の賢人も確かにそういった面の魔術を学んだ。けれど彼らが最も力を入れたのは今では古人の夢想としてしか扱われないほうの魔術の習得だ」

「古人の夢想って……おとぎ話に出てくるような魔術を、ってこと？ 何もないところに火を起こしたりだとか、カエルに化けたりだとか」

子供向けのおとぎ話にはそんな魔術がよく登場する。そういったおとぎ話の中の魔術は大概現実にはありえない現象を起こすものだ。ミラも子供の頃は胸をときめかせてそんな話を聞いていたものだが、さすがに十七歳になった今は子供のための作り話としてしか認識していない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5333z/>

紳士淑女の革命遊戯

2011年12月29日01時47分発行